

2011年3月11日

私はこの日を決して忘れないだろう。当時、私は7歳だった。何が起きているのか、今どんな状況なのか全くわからず、ただ親の言うことに従うしかなかった。幸運なことに私の住んでいる地域は大きな被害がなかったため、すぐに日常生活に戻ることができた。

これにより、今まで私は大きな勘違いをしていた。その勘違いとは、今回のような災害で被害が出なかったため、次の災害でも大きな被害がでないだろうというものだ。しかし、先日行われた仙台防災枠組についての講演を聞いて、それは間違っていると知った。

さて、なぜ仙台で国連防災世界会議が行われたのだろうか。日本は昔から「災害大国」として知られている。そのため、第1回・第2回の国連防災世界会議が日本で行われてきた。そして、兵庫行動枠組に続く枠組を決めるために第3回国連防災世界会議が2015年に行われた。仙台で行うと決められたのは東日本大震災の約2か月後である。私は震災の被害を受けた地域で会議を行うことで、より防災に関する関心が高まるため仙台で行われているのだと思う。

今では、復興も順調に進んでいて、震災のことを知らない世代もいる。今生きている私たちの役割とは、このような世代に震災のことを伝え、災害による被害を少しでも減らせるように努力することではないだろうか。

特に仙台に住んでいる私たちはこの役割を放棄してはいけない。

さらに、震災の被害がほとんどない国々は、防災に関する知識や関心があまりないのではないかと思う。そのような国々に震災の悲惨さを伝えるのは難しいと思うが、それをするのが防災環境都市である仙台の最も重要な役割であるだろう。

近年、日本をはじめとして、インドネシアやパキスタンなどの世界でも大きな災害が多発している。今こそ、世界で協力し災害対策を進めていくべきだ。

今回の防災フォーラムで世界の災害について多くのことを学ぶことができて本当に良かった。この経験をできるだけ多くの人に伝えて、防災都市仙台の一員である私たちが中心となって、世界の防災対策を進めて行きたい。